

「妻が動けない」生活一変

病室に夫(80)が現れると、ベッド上の妻(93)の表情がぱっと明るくなった。起きようとすると肩を抱き、夫は「寝ていていいよ」と優しくさすった。

衰弱した妻が東京城東病院(東京都江東区)に入院してから2か月余り、夫は見舞いを欠かさなかった。

毎日、午前中じやって来て、病院の食堂で昼食をとり、午後明るいうちに帰っていく。仲むつまじい様子は職員の間でも評判になった。

夫婦の出会いが夫の大学時代に遡る。「家内は私が住んでいた下宿の娘。彼女の作るご飯がおいしくて、一緒になったんです」。夫は、医療関連機材を販売する会社に入り、その後独立、

大学病院が多い都心に会社を構えた。「大手と張り合っ、毎日頭を下げて大学病院の調達部を回った」。仕事に励んだ分、家の事は

年上の妻に任せた。

郊外に念願のマイホームを購入。休日には近くの公園を2人で散歩した。子宝には恵まれず、都内の3LDKのオートロックのマンションに買い替えた。引退後は、年金収入でつましく暮らしていた。

2人の生活が一変したのは今年初め。「妻が動けない」という夫の通報で、夜間に救急車で同病院に運ばれた。しかし、翌日の早朝、夫は「大学病院に連れて行く」と言っ、妻を退院させてしまった。

病院の連絡で、夫婦の住

んでいる区の地域包括支援センター相談員、築山佳代子さんが自宅を訪れたが、夫は部屋に入るのをいやがった。リビングの布団に寝ている妻を一目確認するの

かな様子に戻っていた。汚れた布団に寝がされた妻は、皮膚が乾燥しきって衰弱し、脱水症状を起こしていた。腰に床ずれが4か所。枕元に水やパンを置いていたが、夫は「食べ物を出しても食べない」と言う。

が精いっぱい、マンションを後にした。翌日の電話でも断られた。

妻の体調を考えると、放



見舞いに来た夫と手を取り合う妻(東京都江東区の東京城東病院で)

つておけない。2日後、インターホン越しに来訪を告げると、夫は声を荒らげ、「いやだよ」と強く拒んだ。「大学病院への入院の話で来ました」と必死で説得し、通してもらった。

「頭がパカになって、子どももいないから、誰にも頼れなくてつらいんだ」。まず、衰弱した妻を再入院

させなくてはならなかった。(このシリーズは全6回)